

添削と解説

名前	
ID	
e-mail	
開始日	

【添削】

筆者は、移植医療により「身体」は個人のものから公共物へと代わっていくと述べている。臓器移植は、~~個体の範囲を超えて行なわれるため、その管理は「ドナー」や「レシピエント」ではもなく、公共の医療関係機関に委ねられる。~~さらに、「脳死」後の臓器摘出を、~~「本人同意」ではなく「推定同意」で済ますばかりか、家族の同意も不要とするよう規定を改める傾向にある。つまり、臓器移植では、法の規定によって自動的にその身体が「公共利用」に委ねられるのだ。~~いっぽうで、~~このような臓器移植が発達した社会では、「死」は生理学的な身体や器官の「機能停止」と同一視されであり、そのために「殺す」と「壊す」とこととの違いをも感知しにくくさせ、なる。~~この医療システムがついに「殺人」を日常行為の一部と錯覚させてしまう。~~「身体」は今生きる「わたし」から遊離してその「公共性」に委ねられようとしているというのだ。~~

たしかに、臓器移植がこのまま進んでいくと、「生命」や「身体」の意味は違ったものになるだろう。あらゆる臓器が移植されると、その「個人」はいつたい誰なのか、「死」はいつ成立するのか、~~そんななどの社会的問題も出てくるからだ。~~日本で臓器移植法が施行されたのは6年前である。~~今でも、1例目の脳死患者認定のテレビニュースは印象深く目に焼きついている。~~そこには、~~脳死患者から摘出された臓器を入れた容器が運ばれる映像が流れていた。~~脳死による移植には、確実に「ドナー」の死があるはずだが、移植できる臓器は全て取り出され、残っているのはごく一部の組織のみである、という状況に違和感を覚えた。だが、~~そこには移植で助かる「レシピエント」が存在し、現在の~~

日本で必要とされている「生前の本人同意」に異論が出てきている。臓器摘出の確保をめざし、「家族同意」でも認められるように法律の改正が求められているのだ。今後さらに容易に臓器移植が行なえるようになれば、脳死後の臓器摘出は、公共機関による「使用済み身体の接收」になるかもしれないのだ。

しかし、もちろん「公共化する身体」という考え方は間違っている。なぜなら、個人が不在では、「公共」の本来の目的が達成されないからである。「公共」とは、社会全般に行なわれるというだけではなく、各個人が共有するということだ。だが、この医療システムで存在するのは集合体としての「社会」であり、個人は相対的な透明な形式にしか過ぎない。「公共化」とは第三者である公共の機関が実施することとは異なるのだ。公共性が認められるには、国民が主体となる必要がある。たとえば、土地の接收は、多くの国民が接收された土地を有効に活用できるように、国が個人の土地を没収できる制度というものである。もちろん、その土地の所有者の権利とのバランスも慎重に考慮される必要がある。臓器移植について、「公共の機関」が行なうだけで「公共性がある」というのは誤りであろう。

同様なことが、「公共事業」にもいえる。なぜなら、国民にとって有用性や必要性が乏しい「公共による事業」には、「公共性」は認められず、「公共事業」とはならないからだ。国や地方が「公共による事業」をただ実施するだけでは、企業は育たないし、国民の利益にはならないだろう。たとえば、生活保護が必要以上に手厚く行なわれると、保護されるものは働く意欲を失い、結局は幸せな生活をおくれないという。もちろん、「公共事業」は、以前は日本の高度成長を支える大きな役割があった。しかし、現在の状況は全く違う。多くの日本企業は世界規模となり、国民も豊かになっている。むしろ、「道路族」や「郵政族」などのいわゆる「族議員」が、国民の利益を代表していると言いながら、実際には、一部の業界の利益を追求している、といわれている。現在、「公共事業」の一部を国や地方から民間に移行する改革案が出されている。「公共性事業」が国民のためのものであるかどうかをことを念頭に、その是非を大いに検討する必要がある。

【week5 の評価】

要約はまだ無駄な部分が多すぎる。「...でなく」「...を超えて」などの所は作事余する事が出来るはず。本質的な内容だけを書くべきであろう。しかも、第

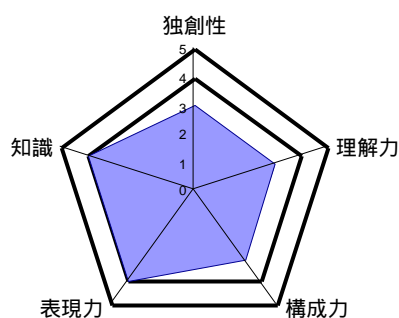
二段落で、筆者の意見に賛成した後の根拠は、私的な体験の感想に終わっていて、論文に必要な客観性が不足している。これでは、エッセイや随筆に近くなってしまふ。

第三段落の「身体の公共化」を批判する論理も危うい。「公共」という概念を巡って、「公共性=各個人の共有」という論点を出しているが、どうしてそういえるのか理由が書いていないし、説明も不足している。これでは説得力が出ない。とくに「公共機関が行うだけでは、公共性とは言えない」とあるが、課題文では「公共機関が行うだけで、公共性がある」と言っているわけではない。

ラストの公共事業との比較自体は悪くないが、きちんと対応が検討されていないので、最後は「政治評論」のようになってしまった。もう少し厳密に書かないといけないうらう。

最後は「公共性」一般に触れること。公共事業の例で終わらせてはいけないうらう。

独創性	3
理解力	3
構成力	3
表現力	4
知識	4
総合評価	C+



【解説】

内容の理解

内容はべつに難しくないのだが、全体が長いことと抽象概念が多いので、やや読みにくい。内容は臓器移植が人間の死や身体の意味を変えたということ

ある。

第一段落は総論。臓器移植は生死、生命、身体のあり方や社会的意味に大きく変える。第二段落は、臓器移植の思想的前提。近代医学の人間機械論に前提を持つことが明らかにされる。第三段落は、主な主張の部分。臓器移植の当事者は、ドナーやレシピエントではなく、公共的医療システムであると言う。第四、第五段落は、その詳しい説明である。身体は生理的意味しかなくなり、それを巨大な医療システムが利用する。

第六、第七段落は、さらなる展開になっている。次第に臓器提供の同意を不必要とされ、死後の身体が「接收」される状況になった。第八、第九段落はその結果。個人の死が見えなくなり、身体が公共化する現状を告発しているところである。

設問の条件に注意する

これに適切に解答するには、設問の言葉に注意する必要がある。「著者の議論を踏まえて」と書いてあるから、課題文の要約から出発するのがよいだろう。要約に加えて「公共化する身体」に対する自分の意見と、「公共性の問題一般」についての議論を両方書かねばならない。ここから、ほぼ解答の構成が決まってくる。このように設問の表現をよく読むと、大体の解答の方向がわかる場合が多い。

「公共化する身体」とは、身体から個人性が消滅し、生理学的な意味しかなくなる事態だろう。しかも、その身体は死後、医療システムによって自由に使われてしまうから、ますます個人の自由にならなくなる。ここから「公共」が個人を無制限に利用してよいのか、という問題が出てくるだろう。個人にはそれぞれ尊厳があるはずなのに、公共の役に立つという視点からしか考えなくなると、それが無視されるという心配が出てくるからだ。個人の尊厳は、公共の利益とどう折り合いをつけるべきか、どこがバランス点なのかなどと考えると「公共性の問題一般について」論じたことになるだろう。解答例では、筆者の主張に賛成するところから始め、それに他の例示や補足的な論理を付け加えるという構成にしてみた。

【解答】

課題文では、臓器移植が身体や生死に対する認識に大きな影響を与えている、

と主張する。人間の身体は機械の部品のように考えられ、それを医療システムが「公共の利益」のために利用する。身体の個別性は消滅し、集合的で非人称的な身体のみがクローズ・アップされているのだ。そのため身体は「公共化」され、個人の生死の意味さえ曖昧になっていると、筆者は危惧する。

たしかに、このような危機的な事態は急速に進行している。臓器移植に賛成する者はドナーカードを持ち歩くことを奨励され、脳死状態に陥ったときには臓器が取り出される。つまり、我々の身体は意識や感情を有機的に支えるものではなく、他の個体にはめ込まれる部品として眺められているのである。このような人間の部品化は、筆者が言うように、もともと近代医学が身体に対して持っていた視線だ。したがって、ドナーカードを持っている人は事故にあっても十分な治療を受けられないという噂は、無知な想像と退けるわけにはいかない。人々は医療の視線自体にこの志向を読み取り、無意識に怯えているのだ。

もちろん医療現場では、移植チームは脳死しつつある患者への治療現場には立ち入れず、脳死が確認された後に始めて関わることができる。つまり治療と移植が分離されることで、患者の人権が守られるという制度になっている。しかし問題なのは、人間の身体がはじめから公共の利益のためという意味づけの元に眺められ、個人の基体としての意味が希薄化することなのだ。そこから、死後の身体を医療システムが「摂取」という状況も可能になる。

ある意味で、この事態は「公共の利益」が個人の尊厳を侵害しているといってもよい状況だ。個人の所有の範囲が極端に小さくなり、社会が従来個人の所有とされてきた部分をコントロールしている。もちろん、これはかつての独裁国家のように、社会が個人の生殺与奪の権利を持つというむき出しの権力と同じではないが、個人の権利の極小化を推進することで、社会による個人の支配という関係を作り出している。「他人のために役立つ」という美名の影で、個人は自らの個性の根拠を曖昧にされ、社会の利益のために消費されつつあるわけだ。独裁国家が、民族や国家という大義名分のために個人を利用したことと同じことが、現代でも「科学の進歩」の形で繰り返されているのかもしれない。(971字)